

平成 26 年度

2 月 1 日

第 1 回午後入試

〔プラウド入試〕

(特待チャレンジ入試①)

国 語

(50 分)

注 意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は 一 から 三 まで、17 ページにわたって印刷してあります。
- 3 解答の下書きが必要なときは、この問題用紙の余白を利用しなさい。
- 4 解答用紙には、受験番号と氏名を書きなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙に書き、解答用紙を提出しなさい。
- 6 句読点、記号は字数に数えなさい。
- 7 本文中には、問題作成のために省略や表現を変えたところがあります。

かえつ有明中学校

一 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「雑草はたくましい」と評される。そして人びとは、雑草の強さにあこがれる。ところが、植物学の分野では、雑草は強いとはされていない。むしろ雑草は、「弱い植物である」とされてもいるのである。

自然界は、弱肉強食である。強いものが生き残り、弱いものは滅び去っていく。植物のなかにも生育が旺盛で、ほかの植物を圧倒する強いものがある。お山の一本杉のようなものがその典型だ。ほかの植物を駆逐して、最後に生き残ったのが、一本杉なのである。あるいは、深い森の中に生い茂る巨木たちは、生存競争の勝者たちだ。タンポポやスミレのような雑草は、暗く深い森の中に暮らすことはできない。「雑草」と呼ばれる植物は、ほかの植物との生存競争に対して「弱い植物」なのである。それでは、世の中がすべて、強い植物ばかりになってしまいかといえ、かならずしもそうではないのが自然界のおもしろいところだ。

じつは、「強い植物」が力を発揮できない場所があるのである。それは、「予測不能な環境」である。強い植物は、安定した条件で力を発揮する。ところが、なにが起こるかわからないという不安定な状況では、力を発揮することができないのである。サッカーの試合を考えてみよう。芝は天然芝の最高のコンディション。お天気は快晴で、風もない。誰だって、そんな恵まれた条件で試合をしてみたいと願うだろう。この恵まれた条件のなかで、プロのサッカーチームと、小学生チームが対戦したとしたらどうだろう。結果は見るまでもない。プロのサッカーチームが勝つに決まっているだろう。ところが最悪のコンディションを考えてみよう。天気は大雨。風も吹き荒れている。グラウンドは、ドロドロにぬかるんでいて、水たまりさえたくさんある。強く降る雨でボールがどこにあるのかもわからないし、味方の位置も見えない。風に飛ばされてボールもどっちへ転がるかわからない。そんな恵まれない条件でサッカーをやるのは、誰だってイヤである。A、そんな不安定な条件で試合をしたとしたら、どうだろう。もしかすると、* 番狂わせの可能性が出てくるかもしれない。そして、小学生チームが、練習の条件に恵まれず、いつも泥んこの河川敷のグラウンドで、強い風が吹きすさぶなかで練習を積み重ねているとしたら、どうだろう。弱いはずの小学生チームが、強いはずのプロのチームに勝つ可能性は高まるだろう。

雑草の*立つ瀬もまさに、そこなのである。

誰だつて恵まれた環境で勝負したい。しかし、安定した環境で勝負を挑んでも、弱い植物が強い植物に勝つことはできないのだ。弱い植物である雑草は、強い植物が力を発揮できない予測不能な環境に^③活路を見出した。予測不能な環境で成功するために必要なものは、強い植物に勝つ「力」ではない。予測不能な環境を克服する「知恵」なのである。逆境は敵ではない味方である。これが雑草の生き方の基本的な哲学である。逆境は誰にとつてもいやなものである。しかし、逆境があるおかげで、弱い植物である雑草に成功のチャンスが訪れる。逆境さえ、乗り切ることができれば、逆境は自分たちの成功を約束してくれる条件となるのである。

恐竜がいた時代は、地球の歴史のなかでももつとも安定した環境であつた。気候は温暖で、地殻変動もない。そんな時代には、力がすべてだつた。恐竜たちは、こぞつて大きさを競つた。植物たちも大型化し、ツクシの仲間が何十メートルもの高さまで、そびえ立っていたのである。^④雑草と呼ばれる植物の祖先が現れたのは、氷河期の終わりごろであるといわれている。氷河の跡にできた不毛の土地が、彼らの最初の生息の場だつたのである。そして、氷河期が終わり、環境が大きく変化する不安定な時代になると、洪水が頻繁に起こる河原や土砂崩れ後の山の斜面など、予測不能で、大型の植物が生えない場所が出現した。そこが雑草の棲みかとなつていたのである。

ところが、人間が現れると、雑草の生活は一変する。木が切られ、村ができると、人びとに踏みつけられたところは大きな植物は生えることができない。森が拓かれ農耕が始まると、草取りもおこなわれる。こうして人間が環境を改変し、次々と予測不能な環境が作られたのである。新石器時代の遺跡からは、すでに雑草の種子が発掘されている。人類が人間としての歴史を刻み始めたとき、そこには、もう道ばたの雑草があつたのである。そして、人類が生息環境を広げていくにつれて、雑草たちもその分布を広げていった。いまや雑草は私たちの身の回りの、ありとあらゆるところを棲みかとしている。好むと好まざるとにかかわらず、^⑤雑草は私たち人類とともに、^{はんえいと}繁栄を遂げてきたのである。雑草は予測不能な乱世を好む植物である。いまや、身の回りは「予測不能な環境」であふれている。まさに雑草たちの時代がやってきたのである。

人類が作りだした都市という環境は、特殊な環境である。土もなく、水も少ない。人や車が、引っこりなしに通っていく。

自然界を生きる植物にとって、都会はけっして「^⑥住みやすい場所」とは言えないだろう。しかし、過酷^{かこく}な環境であるということは、それだけ敵が少ないということである。ライバルとなる植物も少ないし、生存を脅^{おびや}かすような害虫も少ない。もし、都会という厳しい環境に適応することさえできれば、そこはライバルも天敵もない楽園となるのである。ナンバー1の実力を持つ強い植物にとって、都市は住むべき環境ではない。しかし、弱肉強食の生存競争のなかで、勝ち抜くことのできない弱い植物たちにとって都市は、^⑦生存の可能性がある魅力的な場所である。逆境に挑む「雑草」と呼ばれる植物にとって、都市は、生き残り戦略が試される場所である。ライバルとなる植物はいない。ただ求められるのは、都市という厳しい環境を乗り越える B なのである。

(稲垣 栄洋『都会の雑草、発見と楽しみ方』より)

*駆逐 …………… このましくないものなどを追い払うこと。

*番狂わせ …… 予想外の結果になること。

*立つ瀬 …… 自分の安全を保てる場所。

問一 「①自然界のおもしろいところだ」とありますが、「おもしろいところ」の説明として、もっとも適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 植物学の分野では弱い植物とされる雑草が、自然界の生存競争を勝ち抜いていくこと。
- イ 雑草はたくましい植物と思われがちだが、他の植物との生存競争に対しては弱い植物であること。
- ウ 弱肉強食を常とする自然界の中で、弱いとされる雑草が生き残ることがあるということ。
- エ 深く暗い森の中では、タンポポやスミレのような雑草は生き残ることが出来ないこと。

問二 「②強い植物は、安定した条件で力を発揮する」とありますが、この内容を、筆者は後に出てくるサッカーの例の中でどのようなことにたとえていますか。四十五字以内で書きなさい。

問三 A にあてはまるもつとも適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア そして イ しかし ウ だから エ なぜならば オ また

問四 「③活路を見出した」とありますが、その意味としてもつとも適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 苦しい状態から逃れた イ 生きてゆく手立てを見つけた
- ウ 元氣を取りもどすことができた エ 厳しい状況をうちやぶった

問五 「④ 雑草と呼ばれる植物の祖先が現れたのは、氷河期の終わりごろであるといわれている」とありますが、それはなぜですか。理由としてもつとも適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 恐竜たちがさらに巨大化し、力を競い合う状況がうまれたから。

イ 氷河期の半ばころから氷河の跡に、大型植物が生育出来ない場所ができたから。

ウ 気温が温暖になり、地殻変動のない安定した環境になったから。

エ 環境が大きく変化する不安定な時代になり、予測不能な環境が増えたから。

問六 「⑤ 雑草は私たち人類とともに、繁栄を遂げてきた」とありますが、これと同じ内容をのべた部分をぬき出し、最初と最後の四字を答えなさい。

問七 「⑥ 住みやすい場所」とありますが、植物にとってどういう場所のことですか。「環境」につながるように、二十字以内で書きなさい。

問八 筆者は、都市が「弱い植物たち」にとつて「⑦ 生存の可能性がある魅力的な場所」とのべていますが、そういえるのはなぜですか。三十字以内で書きなさい。

問九 Bにあてはまる語としてもつとも適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 活動

イ 壁かべ

ウ 力

エ 知恵

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

春が近づいてから降る雪は湿^{しめ}って重い。

夜、布団^{ふとん}のなかにいても、山の木が折れる音が聞えてくる。パキン、パキンと、呆気^{あつけ}ないほど鋭^{すどろ}く澄んだ音をこだまさせるんだ。

それを耳にすると、たまらない気持ちになる。いますぐ山へ飛んでいって、若木を雪起こししてやんなきゃ。そんな、居ても立ってもいられない気持ちになる。

同時に、哀^{かな}しくもなってくる。だって山には、数えきれないほどの木が植林されている。俺^{おれ}のもたついた作業ぶりじゃ、雪の重みにひしゃげた若木をすべて起こすことなんて、何年かかったってできそうにない。

俺がしきりに寝返りを打っていると、トイレへ行くために部屋を横切るヨキは、

「なあなあ」

と必ず言う。「おまえがそわそわしたって、はじまらんわな。はよ寝え」

本当にそのとおりだ。

雪の重みで折れてしまう木が出てくることも、林業をやっていたら受け入れなければならぬ。すべての木が計画どおりに育つわけがない。①雪で折れる木も生き物。それを防ぐために精一杯。的確に手早く雪起こししていく人間も生き物。鳴いたり動いたりしない木もたしかに生きていて、それと長い年月かけて向きあうのがこの仕事なんだってことに、俺は神去^{かむさり}に
来て一年経って、ようやく気づきつつある。

でも最初は、やっぱりそれどころじゃなかった。

山から響^{ひび}く木の折れる音を聞いて、哀しくはなった。だけどそれは、「木が折れてる。どうしよう」って哀しみじゃなくて、「いやだなあ、また雪起こしだ」という、げっそりするような哀しみだった。

とにかく初日の一本目の木で、雪起こしに失敗したのが効^きいた。

斜面を派手に転げ落ち、ヨキに盛大に笑われた俺は、すっかり萎縮してしまった。転がったさきで岩に頭でも打ちつけたら、死ぬかもしれない。足場の悪い斜面での作業がこわくてたまらず、へっぴり腰でしか縄を引けなかった。

俺にできる仕事なんかないんだ。そう思うと悔しかった。無理やりこんなところにつれてこられて、なんで恥をかきなさいいけないんだ。やってられねえ、と腹が立った。でも実際のところ、なにもできないことが情けなかったんだ。悔しさも腹立たしさも、情けない自分から

I

ために生まれてきた感情だ。

山仕事で集中力が途切れたら、命にかかわる。だから、だいたい二時間ごとにちよつと休憩を取り、昼ものんびり食べる。俺たちは斜面に座って、弁当を広げた。雪解けとともに杉の苗を植える予定の、拓けた場所だ。雪雲はまだ空を灰色に覆いつくしている。

「なあに、この季節はずれの雪も、もう終わりや」

と、巖さんは言った。「*地ごしらえやら植えつけやらで、忙しくなるで」

「そやな」

と、三郎じいさんもうなずく。「雪起こしだけが山仕事やない。だから勇氣、そんなにびくつくことはないわな」

俺は黙ってうつむいていた。俺の技術がちつとも向上しないせいで、班の作業効率が悪いままだ。だれも責めないのが、かえってつらい。なんとか、この村から逃げだせないもんかなあと、そればかり思った。でも、村から出ていく足がない。ヨキはぬかりなく、家では軽トラックのキーを隠していた。だいたい、俺は車の免許を持っていない。徒歩で神去から脱出するのは難しい。ヒッチハイクで駅までつれていってもらいたくても、村人には面が割れている。

② まさに八方ふさがりの状態だった。巨大なおにぎりにかじりつくあいだにも、パキン、とどこかで木の折れる音がする。

II

「どうするんや」

三郎じいさんがヨキを小突く。「おまえが新入りをいじめるもんだから、すっかりいじけちまったねいな」

「いじめてなんかおらん」

抱えたノコの首もとを搔いてやりながら、ヨキは
清一さんはなにも言わなかったけど、このままではまずいと思ったようだ。雪がやみ、風にぬくもりが感じられる晴れた
日に、

「^③今日は勇氣は、山に行かなくていい」

と言った。「かわりに、屋敷林の手入れをしておう」

近場の山へ入る予定の日には、朝はまず清一さんの家に集合することになっている。作業の段取りを確認しあうためだ。
庭にある大きなテーブルを囲み、班のメンバーでお茶をする。冬はドラム缶に木っ端を入れて火をつけ、暖を取って体を
ほぐす。

一日の仕事がはじまるまえから、早くも一休みするって変だけど、これもたぶん、^A神去的「なあなあ」の精神に基づく
習慣だろう。山仕事であせっても、いいことはなにもない。

「全員でか？」

ヨキがミカンを食べながら、面倒くさそうに聞いた。明らかに、足手まといな俺を鬱陶しく思っている顔つきだ。

「いいや。勇氣にはヨキがついて、教えてやってくれ。三郎さんと巖さんと俺は、今日は久須山の南の斜面の地ごしらえを
する」

三郎じいさんと巖さんは、「よっしや」と腰を上げた。ノコまでが、「任せとけ」と言いたそうに鼻をひくつかせてみせる。
ヨキは不満げだったが、おやかたさんである清一さんの命令は絶対だ。

「杉が丸刈りになつても知らんねいな」

と言い、中村家の母屋に隣接した納屋のほうへ歩いていった。清一さんたちは、それぞれの軽トラに乗って山へ向かう。
ノコはじめ、跳ねるようにヨキのあとを追って歩いたが、ヨキになにか言い含められると、「そうですかい、それじゃあ」
という表情で戻ってきて、エンジンをかけた清一さんの軽トラに尻尾を振った。

俺はノコを抱えあげ、軽トラの荷台に乗せてやった。清一さんが運転席から顔を出し、

「木に慣れれば、こわさも薄れる」

と言った。「今日は命綱もあるし、足場もしつかりしてるから大丈夫だ」

もちろん、ちつとも大丈夫じゃなかった。

中村家の敷地を取り囲むように、立派な杉の木が何本も生えている。屋敷林といって、山から吹き下ろす風を防ぐために植えたものだ。清一さんで何代目のおやかたさんなのか知らないけれど、長くつづいた家なのはまちがいない。屋敷林はいまや、神社みたいにこんもり繁っていた。

ヨキは納屋から、屋敷林を手入れするのに必要な道具を引っ張りだした。太いベルト。端に金具のついた頑丈なロープ。それから昇柱器という刃だった。ズボンと作業靴のうえから、刃が脚の内側にくるように二本のバンドで固定する。刃の先端を幹に突き刺せば、枝のない木にも登れる仕組みだ。

ただどこれがむずかしい。俺はさんざん抵抗した。

「こんなものを刺したら、木に傷がついちやうじゃないか」

「屋敷林は材木にするわけやないから、傷物になったってええわいな」

「木に登つてるときに足を固定するのは、この刃物だけなんだろ？ それってかなり不安定じゃ……」

「腰に命綱つけるから、平気やねいな。ええから行け」

ヨキにどつかれ、敷地の東側に並ぶ杉の下に立った。二階建ての屋根だつてゆうに越すほどの樹高がある。

言われるままに、腰にベルトをつける。ヨキは金具のついたロープを、俺のベルトに引っかけた。ロープは輪になっていて、杉の幹をぐるりと一周している。俺は杉の木に抱きつく形で、ロープに固定されてしまった。

ベルトからはもう一本ロープがのびていて、そっちにはチェーンソーがぶらさげられている。木に登るときは両手を空けておいて、目標の地点まで登ったら、チェーンソーをたぐり寄せて枝を切れ、ということらしい。

その際に体を支えるのは、幹とつながった腰のベルトのロープ一本。足の踏ん張りを利かせるのは、幹に浅く食いこませた昇柱器の刃だけ。

地上六メートルの高さで、そんな* アクロバティックな姿勢でチェンソーを振るわなければならない。
無理、絶対無理。

ところがヨキは、昇柱器もなしに俺の隣となりの杉に取りつき、腰のロープ一本で苦もなく木を登っていく。猿さるかよ。ベルトにはいつもの斧おのが挟はさんであるだけだ。

「どうした、はよせんか」

ヨキは幹の真ん中あたりに蟬せみのようにへばりついたまま、まだ地面に立ってもじもじしていた俺を見下ろした。

早くと言われても、なにをどうしたら、なんの手がかりもない太い幹を登れるのかわからない。俺はとりあえず、幹に腰をまわし、左足から生えた刃を樹皮に引っかけようとした。チェンソーと、足につけた昇柱器が重くて、思うようにならない。ようやく少し体が持ちあがる。横綱よこづなの胸むねを借りる幕下力士まくしたりきしみたいな、情けない恰好かっこうだ。

と、次の瞬間しゆん、昇柱器の刃がすべり、俺は顎あごを幹にこすりつけながら地上に逆戻りした。

「なにをやつとるねいな」

ヨキがため息をついた。すると木を下りてロープをはずし、俺の背後に立つ。

「ケツ押しあげてやるから、もう一度やってみい」

いやと言えない、気弱な性格がうらめしい。しかたなく、再び幹に取りついた。

「腰を支点に、体をそらし気味にするんや」

「足、足！ ちゃんと刃をめりこませんとあかん」

次々と注意され、必死に体を動かす。ヨキが尻しりを押してくれたこともあって、なんとか自分の背丈より高い位置まで登ることができた。枝のある場所まではまだまだ遠い。

「よっしゃ」

とヨキが言った。「おまえ、身軽みがるやな。そのまま登ってみい。なBあなあでやぞ」

ゆっくり、落ち着いて。俺は慎重しんちょうに手足を動かした。少しコツがつかめた気がする。ヨキの言うとおり、腰を支点にする

と腕の力はあるにいらぬ。どの角度で幹に刃を立てればいいかも、足もとを見ずに見当がつくようになってきた。

「けっこう、けっこう」

声はすぐ近くからした。ヨキはもう隣の杉の、俺と同じ高さまで登ってきていた。安全ヘルメットの下で、^④目が笑っている。はじめて褒められ、俺もうれしくなった。幹から片手を離し、頬を掻く余裕まで生まれた。

「その調子や。どの枝切ったらええかは、俺が隣から指示したる。もつと登れ。下見たらあかんで」

そう言われると見たくなる。俺は首をめぐらそうとした。ヨキは素早く杉葉をむしり取り、腕をしならせて投げつけた。「あかんて言うてるねいな！」

どの枝を切ればいいか。切りすぎると屋敷林としての用をなさなくなるし、放ったままにしておくとか家に日が射さない。ヨキに隣から教えられるまま、俺は木の上で枝を払っていった。一本の杉を形よく仕上げるのに、午前中いっぱいかった。ヨキは俺から目を離さず、しかし次々にいろんな木を登り降りして、俺の五倍は仕事をこなした。

昼の休憩で地上へ下りると、足がぐくぐくした。ヨキに悟られないよう、なんとか踏ん張って歩き、庭のテーブルで巨大おにぎりを食べた。

^⑤日射しはますますあつたかい。気温が上がると、空気いろんなにおいが混じりはじめる。小川を流れる澄んだ水の甘さ。いままさに土を押しつけようとする草の青さ。どこかで枯れ枝を焼く焦げくささ。冬のあいだに山深い場所で死んだ獣のすかな腐臭。なにかもがいつせいに動きはじめ、新しい季節を迎えようとしている。

(三浦 しをん『神去なあな日常』より)

*萎縮して……………ちぢこまって元気がなくなり。

*地ごしらえ……………苗などを植える前の土地の準備をすること。

*面が割れている……………顔が知られている。

*鬱陶しく……………なんとなく重苦しくて、心がはればれとしなく。

*アクロバティックな……………はげしい動きをとまなう。

問一 「雪で折れる木もく気づきつつある」について、次の問いに答えなさい。

1 「俺」の「仕事」とは何ですか。文中から漢字二字で答えなさい。

2 A 「神去に来て一年経って」とありますが、「二年前」の「俺」は「雪で折れる木」の「音」を聞いて、どんな気持ちになったのですか。三十五字以内で文中からぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。
B 一方、今は同じ「音」を聞いてどんな気持ちになるのですか。八十字以内で書きなさい。

問二 I にあてはまるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 背を向ける イ 目をそらす ウ 土俵どじょうを下りる エ 音ねを上げる

問三 俺たちとありますが、だれのことですか。「俺」をふくめた人物をすべて呼び名で答えなさい。

問四 「まさに八方ふさがりの状態だった」について、次の問いに答えなさい。

1 「八方ふさがり」の意味として、もっとも適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 何をしてもうまくいかず、困ること イ 一か所に閉じ込められてしまうこと
ウ 胸がいっぱいになること エ 一人ぼっちで助けてくれる人がいないこと

2 「八方ふさがり」の気持ちをも、「俺」が心のなかで語っているところがあります。その部分をぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問五 II・III にあてはまるものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 胸騒むなさわぎがした イ いらだちを見せた ウ 涙があふれた エ そわそわした オ ため息が出た
カ 平然と答えた キ 目をふせた

問六 「③今日は勇氣は、山に行かなくていい」とありますが、これは、「清一さん」のどんな気持ちをあらわしていますか。

もつとも適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 勇氣にこれまでの仕事のまずさを反省してもらいたい。

イ 勇氣の技術のなさを見て、残念だが仕事をあきらめさせたい。

ウ 勇氣の身体を心配し、ゆつくりと休養することをすすめたい。

エ 勇氣を今の行きづまりからぬけ出させて、立ち直れるよう氣を配りたい。

問七 「A神去的『なあなあ』の精神」とありますが、このあとの「Bなあなあ」と合わせて読み取れる「なあなあ」の意味を二十五字以内で書きなさい。

問八 「④目が笑っている」とありますが、この時の「ヨキ」の気持ちとしてもつとも適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 初めはうまくいかなかったが、自分の手助けや「なあなあでやぞ」のことばを受けて「俺」がコツをつかんでくれたことが、うれしい。

イ 自分のアドバイスを素直に受け入れ、だれの目から見ても「俺」が一人前に成長してきたことがわかり、満足している。

ウ 今まで反抗的だった「俺」が、自分のアドバイスによって、意欲を出して仕事に取り組み上達したので、逆にあせっている。

エ 次々と投げかける自分の注意に「俺」がすばやく反応することができないようすを見て、内心ではいらだち、すっかりあきれている。

問九 「日射しはますます新しい季節を迎えようとしている」とありますが、この表現から読み取れることを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「俺」のあせりやいらだちをいやしてくれる自然を描いている。
- イ 「神去」の自然が、見るものやにおいて春を感じさせている。
- ウ 「俺」のなかに芽生^めえた気持ちの変化に、自然の風景を重ね合わせている。
- エ 季節の細やかな変化を、耳に届くさまざまな音で表現している。
- オ 「俺」のなかの不安や恐れが直接的に表現されている。
- カ 「神去」のきびしい自然と「俺」の気持ちとをだぶらせている。

三

次の各問いに答えなさい。

問一 次の――部の意味をあとから選び、記号で答えなさい。

1 彼とは同じ釜かまの飯めしを食った。

ア 同じ目的をもつ仲間だった。

イ よく似にている者同士どうしだった。

ウ 苦楽を共にする関係だった。

エ よい競争相手であった。

2 彼はとても目がきく。

ア ものの価値を見分ける力がある。

イ 見るだけで音を推理すいりすることができる。

ウ 遠くまで見ることができる。

エ 色合いのかすかなちがいに気がつく。

3 対戦を前にいまから腕うでが鳴る。

ア 技術が急激きゅうげきに上達する。

イ 腕前を示そうとして空回からりしている。

ウ 自分の能力に自信をもてずにこわがっている。

エ 自分の力を発揮したくてじつとしていられない。

問二 次の――線と同じ意味で使われているものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

1 古い友人のことがしきりに思い出される。

2 このパソコンは性能がよいそうだ。

3 雲は水や氷のつぶであると先生は教えた。

ア 弟が犬にかまれる。

イ 先生が昔の思い出を話される。

ウ 祖母に会う夏休みが待たれる。

エ 弟は、今にも泣きそうだ。

オ 今晚から雪が降りそうだ。

カ 妹からの手紙がきのう届いたそうだ。

キ 年賀状が届いたと祖父に言う。

ク いなかに帰るとなぜか安心する。

ケ 父と母とで見舞いに出かけた。

問三 次の――部を漢字に直しなさい。

1 人工エイセイの開発競争。

2 スイスはエイセイ中立を宣言した国です。
せんげん

3 結果よりもカテイが大切だと教えられました。

4 もしもの場合をカテイしてみなさい。

5 人々のシセンが私に集中した。

問四 次のことわざと反対の意味のことわざを後の語群から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 1 鳶とびが鷹たかを生む
2 案あんずるより産うむがやすし
3 善ぜんは急いそげ
4 提灯ちようちんに釣つり鐘かね

- ア のれんに腕うで押し
イ どんぐりの背せ比べ
エ 弱しやかり目にたたり目
オ 蛙かえるの子は蛙
キ 釈迦せつぽうに説法
ク 馬の耳に念仏
カ 石橋いしばしをたたいて渡わたる
ウ せいては事をしそんじる